

第30回夏期福音特別集会 (3) (伊東)

実存の主に帰らん

――イザヤ書第13章～23章――

1983年7月23日

小池辰雄

バビロンの滅亡 公平と義をもて審きたもう 本当の愛国 根元現実 我はアーメンなり まるで戦国時代 エホバの審判の日 神の似姿の人に帰れ 我こそは遺りの民 神の歴史の一端を賜る

【イザヤ13】

1 アモツの子イザヤが示されたるバビロンにかかる重負の預言。2 なんじらかぶろの山に旗をたて、声をあげ手をふり、彼等をまねきて貴族の門にいらしめよ。3 われ既にきよめ別かちたるものに命じ、わが丈夫ほこりかにいさめる者をよびて、わが怒りをもらさしむ。4 山におおくの人の声きこゆ。大いなる民あるがごとし。もろもろの国民のよりつどいて喧めく声きこゆ。これ万軍のエホバたたかいの軍兵を召したもうなり。5 かれらはとおき国より天の極よりきたる。これエホバとその忿怒をもらす器とともに全国をほろぼさんとして来るなり。6 なんじら泣号ぶべし。エホバの日ちかづき、全能者よりいづる敗亡きたるべければなり。7 この故にすべての手はたれ、凡の人のこころは消えゆかん。8 かれら憎きおそれ、艱難と憂いとにせまられ、子をうまんとする婦のごとく苦しみ、互いにおどろき相みあいてその面は焰のごとくならん。9 視よエホバの日苛くして忿怒とはげしき怒りをもて来り、この国をあらし、その中よりつみびとを絶滅さん。10 天のもろもろの星とほしの宿りは光をはなたず、日はいでてくらく、月はその光をかがやかさざるべし。11 われ悪きことのために世をつみし、不義のために悪きものを罰し、驕れるものの誇りとどめ、暴ぶるものの傲慢をひくくせん。12 われ人をしめて精金よりもすくなく、オフルの黄金よりも少なからしめん。13 かくて亦われ万軍のエホバの忿怒のとき烈しき怒りの日に天をふるわせ、地をうごかしてその処をうしなわしむべし。14 かれらは逐る鹿のごとく、集むるものなき羊のごとくなりて、各自おのれの民にかえりおのれの国にのがれゆかん。15 すべて其処にあるもの見出さるれば刺され、拘留らるるものは剣にたおされ、16 彼等の嬰兒はその目前にてなげくだかれ、その家財はかすめうばわれ、



その妻はけがさるべし。

17 視われ白銀しろがねをもかえりみず、黄金をもよろこばざるメデア人をおこして之にむかわしめん。18 かれらは弓をもて若きものを射くだき腹の実をあわれむことなく、小子おきなをみておしむことなし。19 すべての国の中にてうるわしくカルデヤ人がほこり飾かざりとなせるバビロンは、むかし神にほろぼされたるソドム、ゴモラのごとくならん。20 ここに住むもの永くたえ、世々にいたるまで居るものなく、アラビヤ人もかしこに幕屋をはずす、牧人ひつじかいもまたかしこにはその群をふさすることなく、21 ただ猛獸あらきけものかしこにふし、吼るものその家にみち、駝鳥たかかしこにすみ、牡山羊おやぎかしこに躍らん。22 豺狼おおかみその城のなかになき、野犬のいぬえいぐわの宮にさけばん。その時のいたるは近きにあり。その日は延ることなかるべし。

【イザヤ14】

1 エホバ、ヤコブを憐みイスラエルをふたたび撰えらびて之をおのれの地におきたまわん。異邦人ことくにとこれに加わりてヤコブの家にむすびつらなるべし。……8 実にまつの樹およびレバノンの香柏さえもなんじの故により歡びていう、汝すでに仆ふしたれば樵夫きこりのぼりきたりてわれらを攻せむることなしと。9 下の陰府よみはなんじの故により動きて汝のきたるをむかえ、世のもろもろの英雄の亡霊なきたまをおこし、国々のもろもろの王をその位より起たちおこらしむ。10 かれらは皆なんじに告げていわん、汝もわれらのごとく弱くなりしや、汝もわれらと同じくなりしやと。11 なんじの榮華となんじの琴の音はすでに陰府よみにおちたり。蛆うじなんじの下にしかれ、蚯蚓みみずなんじをおおう。12 あしたの子明星よいかにして天より隕おちしや、もろもろの国をたおしし者よいかにして斫きれて地にたおれしや。13 汝さきに心中こころのうちにおもえらく、われ天にのぼり我くらしいを神の星のうえにあげ、北の極はてなる集会ついでの山にぎし、14 たかき雲漢くもいにのぼり至上者いとたかきもののごとなるべしと。然どなんじは陰府におとされ坑あなの最下いにいれられん。……24 万軍のエホバちかい誓ちかをたてて言い給わく、わがおもいし事はかならず成り、わがさだめし事はかならず立たん。25 われアツスリヤ人をわが地にてうちやぶり、わが山々にてふみにじらん。ここにおいて彼がおきし軓くびきはイスラエル人よりはなれ、彼がおわせし重負おもにはイスラエル人の肩よりはなるべし。26 これは全地のことにつきて定めたる謀略はかりごとなり。是はもろもろの国のうえに伸ばしたる手なり。27 万軍のエホバさだめたまえり。誰かこれを破ることを得んや。その手をのばしたまえり。誰かこれを押返おしかえすことを得んや。

28 アハズ王の死たる年おもにの預言ありき。

29 曰く、ペリシテの全地よなんじをうちし杖おれたればとて喜ぶなかれ。



蛇の根より蝮まむしいで、その果はとびかける巨蛇おろちとなるべければなり。³⁰いと貧しきものはものくい、乏としきものは安然やすらかにふさん。われ饑饉うすりをもてなんじの根をしなせ、汝がのこれる者をころすべし。³¹門よなげけ邑まちよさけべ。ペリシテよなんじの全地きえうせたり。そはけぶり北よりいできたり、その軍兵つわものの列つらにおくるものなし。

³²その国の使者つかいたちに何とこたうべきや。答えていわん、エホバ、シオンの基もとをおきたまえり。その民のなかの苦しむものは避所あけいしやうをこの中うちにえん。

【イザヤ15】

¹モアブにかかる重負おもにのよげん曰く。モアブのアルは一夜の間にあらされて亡びうせ、モアブのキルは一夜のまに荒されてほろびうせん。……⁵わが心モアブのために叫びよばわれり。その貴族はゾアルおよびエグラテシリシヤにのがれ、哭なきつつルヒテの坂をのぼり、ホロナイムの途みちにて敗亡はろびの声をあぐ。……

【イザヤ16】

¹なんじら荒野のセラより羔羊こひつじをシオンの女むすめの山におくりて国の首おさにおさむべし。……⁵ひとつの位あわれみをもて堅くたち、真実まことをおこなう者そのうえに坐せん。彼ダビデの幕屋において審判をなし、公平をもとめて義をおこなうに速し。

⁶われらモアブの傲慢たかぶりをきけり。その高ぶること甚だし。われらその誇りとたかぶりと忿恚いまだいりとをきけり。その大言はむなし。……¹¹このゆえにわが心腸はモアブの故をもて琴のごとく鳴りひびき、キルハレスの故をもてわが衷うちもまた然り。¹²モアブは高处にいでて倦みつかれ、その聖所きよきとしやうにきたりて祈るべけれど験しるしあらじ。

【イザヤ17】

¹ダマスコにかかわる重負おもにの預言いわく。視よダマスコは邑まちのすがたをうしないて荒墟あらつたとなるべし。²アロエルの諸邑まちはすてられん。獣畜けもののむれそこにすみてその伏しやすめるをおびやかす者もなからん。³エフライムの城はすたり、ダマスコの政治まつりごとはやみ、スリアの遺れる者はイスラエルの子輩こちのさかえのごとく消えうせん。是は万軍のエホバの聖言なり。

⁴その日ヤコブの榮はおとろえその肥たる肉はやせて、⁵あだかも收穫かりいれ人の麦をかりあつめ腕かいなをもて穂をかりたる後のごとく、レパイムの谷に穂をひろいたるあとの如くならん。⁶されど橄欖樹かんらんぎをうつとき二二三の核みを杪こずえにのこし、あるいは四つ五をみのりおおき樹きの外面そとのえだに遺せるが如く、採りとのこさるるものあるべし。是これイスラエルの神エホバの聖言なり。⁷その日人お



のれを造れるものを仰ぎのぞみイスラエルの聖者に目をとめん。⁸斯ておのれの手の工なる祭壇をあおぎ望まず、おのれの指のつくりたるアシラの像と日の像とに目をとめじ。……¹²ああおおくの民はなりどよめけり。海のなりどよめく如くかれらも鳴響めけり。もろもろの国はなりひびけり。大水のなりひびくが如くかれらも鳴響けり。¹³もろもろの国はおおくの水のなりひびくがごとく鳴響かん。されど神かれらを攻めたもうべし。かれら遠くのがれて風にふきさらるる山のうえの粧糠のごとく、また旋風にふきさらるる塵のごとくならん。¹⁴視よゆうぐれに恐怖あり。いまだ黎明にいたらずして彼等は亡せたり。これ我儕をかすむる者のうくべき報い、われらを奪うもののひくべき鬪なり。

【イザヤ18】

¹ああエテオピアの河の彼方なるさやさやと羽音のきこゆる地、……³すべて世におけるもの地にすむものよ、山のうえに旗のたつとき汝等これを見、ラッパの鳴り響くときなんじら之をきけ。……⁷そのとき河々の流れのわかるる国の丈たかく肌なめらかなる始めより今にいたるまで懼るべく縄もてはかり人をふみにじる民より、万軍のエホバにささぐる礼物をたずさえて、万軍のエホバの聖名のところシオンの山にきたるべし。

【イザヤ19】

¹エジプトにかかる重負のよげんいわく。エホバははやく雲にのりてエジプトに來りたもう。エジプトのもろもろの偶像はその前にふるいおののき、エジプト人のところはその衷にて消えゆかん。²我エジプト人おたけび勇ましめてエジプト人を攻めしめん。斯てかれら各自その兄弟をせめ、おのおのその鄰をせめ、邑は邑をせめ国はくにを攻むべし。³エジプト人の靈魂うせてその中むなしくならん。われその謀略をほろぼすべし。かれらは偶像および呪文をとなうるもの巫女魔術者にもとむることを為ん。……¹²なんじの智者いづくにありや。彼らもし万軍のエホバの定めたまいしエジプトに係わることを曉り得ば、これをなんじに告ぐるこそよけれ。……¹⁶その日エジプトは婦女のごとくならん。万軍のエホバの動かしたもう手のその上にうごくが故におそれおののくべし。¹⁷ユダの地はエジプトに懼れらる。この事をかたりつぐれば聴くもの皆おそる。これ万軍のエホバ、エジプトに対して定めたまえる謀略の故によるなり。

¹⁸その日エジプトの地に五の邑あり。カナンの方言をかたりまた万軍のエホバに誓いをたてん。その中のひとつは日邑となえらるべし。

¹⁹その日エジプトの地の中にエホバをまつる一つの祭壇あり。その境にエ



ホバをまつる^{ひとつのはしら}。一柱あらん。……²²エホバ、エジプトを撃ちたまわん。エホバこれを撃ちこれを医^いしたもう。この故にかれらエホバに帰らん。エホバその懇求^{ねがい}をいれて之をいやし給わん。

²³その日エジプトよりアツスリヤにかよう大路ありて、アツスリヤ人はエジプトにきたり、エジプト人はアツスリヤにゆき、エジプト人とアツスリヤ人と相共につかうることをせん。

²⁴その日イスラエルはエジプトとアツスリヤとを共にし三あいならび地のうえにて福祉^{さいわい}をうくる者となるべし。²⁵万軍のエホバこれを祝して言いたまわく、わが民なるエジプトわが手の工^{わざ}なるアツスリヤわが産業なるイスラエルは福^{さいわ}いなるかな。

【イザヤ20】

一アツスリヤのサルゴン王タルタンを遣してアシドドにゆかしむ。彼がアシドドを攻めてとりし年にあたり、²この時エホバ、アモツの子イザヤに托てかたりたまわく、往けなんじの腰よりあらたえの衣をとき汝の足より履^{くつ}をぬげ。ここに於てかれその如くなし赤裸^{はだか}跣足^{はだし}にて歩めり。³エホバ言^い給く、わが僕イザヤは三年の間はだか^{はだか}はだしにてあゆみ、エジプトとエテオピアとの予兆^{しるし}となり、奇^くしき標^{かた}となりたり。……

●バビロンの滅亡

今日はイザヤ書の13章から23章という、大変な分量ですが、取り上げるのはもちろん、その重点のところだけです。

その当時の東西南北の国々に対して重い預言がイザヤをとおしてなされるわけです。まず最初にバビロンの滅亡のことが13章に書いてある。この預言は多分、紀元前550年頃です。いろいろな預言がなされているので、「イザヤ」といいましても、必ずしも第一イザヤではない。そういう学問上のことは今は省きます。

一アモツの子イザヤが示されたるバビロンにかかる重負^{おもに}の預言。

「重負^{おもに}の預言」という妙な言葉が使つてある。重い神託であります。

²なんじらかぶろの山に

はげ山のことです。

旗をたて、

時々、「旗」という言葉が出てきます――「キリストの御旗をかかげて」という讃美歌もあります――神の戦いのしるしです。

声をあげ手をふり、彼等をまねきて貴族の門にいらしめよ。

「貴族の門」というのはバビロンの城門のこと。



3 われ既にきよめ別ちたるものに命じ

この場合の「きよめ別ちたるもの」というのはメデア軍のことをいうらしい。

わが丈夫^{ますらお}ほこりにいさめる者をよびて、わが怒りをもらさしむ。

バビロンに対する神の怒りです。

4 山におおくの人の声きこゆ。大いなる民あるがごとし。もろもろの国民のよりつどいて喧^{さわ}めく声きこゆ。

この場合に、メデアはなかなか勢力があつたとみえて、それに集まってくるわけです。

これ万軍のエホバたたかいの軍兵^{つわもの}を召したもうなり。5 かれらはとおき国より天の極^{はて}よりきたる。これエホバとその忿^{いきどお}恚をもらす器

このメデアの大軍です。

とともに全国をほろぼさんとて来るなり。6 なんじら泣^な号ぶべし。エホバの日ちかづき、

「エホバの日」とは審判の日、あるいは怒りの日。

全能者よりいづる敗^{はろ}亡きたるべければなり。

そういう審判、怒りがくる。そしてその相手は滅ぼされていく。9 節、

9 視よエホバの日苛^{から}くして忿^{いきどお}恚とはげしき怒りとをもて来り、この国をあらし、その中よりつみびとを絶滅^{たちほろ}さん。10 天のもろもろの星とほしの宿りは

「ほしの宿」というのはオリオンです。オリオンは非常に光る星座ですが。

光をはなたず、日はいでてくらく、月はその光をかがやかさざるべし。11 われ悪^{あし}きことのために世をつみし、不義のために悪きものを罰し、驕^{おご}れるもの

の誇りとどめ、暴^{あら}ぶるものの傲慢^{たかぶり}をひくくせん。

「驕れるものの誇」「暴ぶるものの傲慢」と、たたみかけて強く言っている。天の星も光を放たず、日も暗くなるというような、こういう言い方は預言者には時々出てきます。ヨエル書あたりに。非常に壮大です。今はいくら近代兵器が凄くても、預言者たちは天体を相手にしてものを言っている。

12 われ人をして精金^{よきこがね}よりもすくなく、オフルの黄金^{こがね}よりも少なからしめん。

「オフル」は金の名産地ですが。そんなにみんなダメに、また乏しくなってしまうぞ、審判を受けるぞと。

13 かくて亦われ万軍のエホバの忿^{いきどお}恚のとき烈しき怒りの日に天をふるわせ、地をうごかしてその処をうしなわしむべし。

まあ大変だ。天変地異だ。地震という言葉は、まさにこれは地震だな。天が震う。私が号に時々、「天震」なんて書くのは、その角度から、神さまの怒りを時々思うから、書くんですけれども。17 節、

17 視よわれ白銀^{しろがね}をもちえりみず、黄金をもよろこばざるメデア人をおこし



て之にむかわしめん。

即ち、神さまはバビロンを滅ぼすために、今度はメデアを使う。イスラエルを滅ぼすためにアッシリヤを使ったような具合に。

18 かれらは弓をもて若きものを射くだき腹の実をあわれむことなく、おさない 小子をみておしむことなし。

まあ徹底的なんだな。

19 すべての国の中にてうるわしくカルデヤ人が

「カルデヤ」とはバビロンのことです。

ほこり飾かざりとなせるバビロンは、むかし神にほろぼされたるソドム、ゴモラのごとくならん。20 ここに住むもの永くたえ、世々にいたるまで居るものなく、アラビヤ人もかしこに幕屋をはらず、牧人ひつじかいもまたかしこにはその群をふさずることなく、21 ただ猛獣あらぎけものかしこにふし、吼ほゆるものその家にみち、駝鳥いぬかしこにすみ、牡山羊おやぎかしこに躍らん。22 豺狼おおかみその城のなかになき、野犬のいぬえいぐわの宮にさけばん。その時のいたるは近きにあり。その日は延のぶることなるべし。

非常に黙示文学的な、あるいは黙示録的な――黙示録にも非常に審判の凄いことが出てきますが――こういうようにして、バビロンは審かれてしまう、滅びてしまうという。

●公平と義をもて審きたもう

14章に行きまして、

1 エホバ、ヤコブを憐あわれみイスラエルをふたたび撰えらびて之をおのれの地にお

きたまわん。

一遍、審かれた。滅ぼされて、ひどい目にあうけれども、しかし、それはやがて、裂いてまたこれを癒すというようなわけですね。バビロンを滅ぼすのは、イスラエルを解放するためだというわけです。4節から嘲りの歌がずっと出てくる。これはイザヤよりもだいぶ後の時代のことと考えられるので、多分、前6世紀頃の歌ではないかとされています。けれども、中味はなかなかちよつと注目すべき言葉があります。8節、

8 実にまつげの樹およびレバノンの香柏きこりさえもなんじの故により歎なげびていう、汝きこりすでに仆ふしたれば樵夫きこりのぼりきたりてわれらを攻せむることなしと。9 下の陰府よみはなんじの故により動きて

「なんじ」というのはバビロン王のことです。

汝のきたるをむかえ、世のもろもろの英雄なきたまの亡霊をおこし、国々のもろもろの王をその位より起たちおこらしむ。10 かれらは皆なんじに告げていわん、汝もわれらのごとく弱くなりしや、汝もわれらと同じくなりしやと。

即ち、陰府の中にみんな入れられてしまったかと。バビロンのいかに惨めなことになるか



ということを嘲ったような歌なんです。

11 なんじの榮華となんじの琴の音はすでに陰府におちたり。蛆なんじの下に
しかれ、蚯蚓みみずなんじをおおう。

12 節がちよつと注目を要する。

12 あしたの子明星よ

バビロン王のことを「あしたの子明星」に例えたわけです。非常に盛んであったことを。また、「あしたの子明星」というのは、別な角度からは、ルチフェロのことをいうので、サタンは非常に優れた天使だったのが、傲慢になったので――「我も神の如くならん」という傲慢になった――それで落とされる。ミルトンの『パラダイス・ロスト』に出てきます。

いかにして天より隕おちしや、もろもろの国をたおしし者よいかにして斫きれて地
にたおれしや。13 汝このうちさきに心中におもえらく、われ天にのぼり我くらいを

自分の王座を、

神の星のうえにあげ、

これは大変な言葉です。神さまが造られた神の王座のほitoriにある星のその上にあげ、

北の極はてなる集会つどいの山にざし、

「北の極なる集会」というのは、いろいろな神々の集いのことをいう。これは神話の方からきてます。詩篇48篇にもちよつと出てますが。

14 たかき雲漢くもいにのぼり至上者いとたかきもののごとくなるべしと。

ここらの聖書の句は非常にミルトンに引用されています。

然どなんじは陰府におとされ坑あなの最下いやくしたにいれられん。

ちやうどダンテの『神曲』で地獄の一番どん底にサタンが置かれた。ダンテはこの辺からまた考えたかもしれませんが。ここらはそういう意味で非常に黙示録的な前段をなすようなところですよ。そういうようにして、バビロンの榮えもう地獄に落とされてしまう。神さまはすべて公平と義をもて審きたもう。イスラエルといえども容赦しない。だから、イスラエルもユダも両方とも滅ぼされてしまった。決していわゆるひとりよがりの愛国心では絶対にはないです、この預言者は。愛すればこそ烈しい預言をもつて迫ってくる。それは本当に叩いて、そしてそいつを起こすためである。

サウロがパリサイの権化でした。それがキリスト者を迫害してたら、キリストは、

「なんぞ、我を迫害するか」

と言って、パウロをひっくり返してしまった。彼は目が見えず耳が聞こえずものが言えずということになった。徹底的にパウロを撃ったことは、パウロを本当にひっくり返して造り変えるためです。新たに生まれしめるため。そういうキリストへの回帰、回りめぐり帰りは、パウロほど鮮やかなものはない。そのためにキリストはいい加減なことをなさらなかったわけです。徹底的にやられた。



● 本当の愛国

そのようなことで、日本がこんなことをやっている、ちよūdバビロンへの預言みたに、神さまにこつびどくやつつけられる。ソ連が恐いのではない。神さまが恐いんです。神さまはソ連を使つてか何かはしらんけれども。日本はいつまでたつても神を受けとらず、否んでいて、そしてまあ何が民主主義かというような、こういうような国では。

私は学校で、

「孝道が民主主義に反するならば、私は民主主義を棄てる」

とはつきり言つてやった。親を親とも思わず、先生を先生とも思わないようだったら、そんなことが民主主義ならば、そんなのがいわゆる平等とか何とかということだったら、私はもう大反対だと。親を親と思わず、先生を先生と思わずというのが、今はそうでしょ。

私の兄貴は内村先生をおして信仰の世界に入った。そしたら、それまでとは――なにも傲慢だとはいひませんけれども――非常にはつきり変わった。お母さんの言うことは、何でも「はいつ」と言つて、それを必ず実行していました。無理なことを仰つても。決して、反抗することは絶対にない。

我々はまた学校でも、先生に対して本当にそのようにして、先生を絶対的にして、先生を批判するなんてことは、あるいは何か口答えるなんてことはなかった。学校から帰つてきたら、ちゃんと手をついて、

「ただ今帰りました」

と言つたものだ。今は、

「おはようございます」「おやすみなさい」「行つて参ります」「ただ今帰りました」と、そういうことが本当に行われている家庭がいったいどれくらいあるかと思ひます。

まず、日本人としての道――道の民だ――そういう道がたたないようなあり方をしていて、なんやかんやと言つても、結局そういうことが日常に本当に実践されていなければダメなんです。まあもうこれはしょうがないね、正直。結局、この戦争に負けてからあとの、親、先生、社会、みんなこれの責任だ。要するに日本人そのものが。子どもをなにも責めるわけではない。

改まるのに遅きことはない。いつであろうとも――もうあれだけの歳になつたから遅い」というのではなく――若きも年とつた者も、男も女も、それが本当に造りかえられる、新人にされるという、その道はいずこにあるか。それはキリストの道しかない。孝道の道。

「我こそは道なり」

というのは――孝道であろうと何道であろうと――道とは身についていなければ道ではない。あたまで「分かりました」ではしょうがない。真理も、

「我は真理なり」

というのは、身につけるべきところのもので、



「私は真理、エメツというものが身についている」ということです。

「預言書を読んでいて、本当の愛国ということが分かった。新約聖書では、魂の救いを私は受けとった。旧約の預言者では、愛国ということが分かった」

と言うのが内村先生です。その内村先生の愛国は正に預言者的な愛国ですから。

「こんなことをしたら、日本は滅びるぞ。神に帰れ。いくら西洋文明を受けとったって、本当の福音を受けとらなかつたらダメなんだ」

と、はつきり言うことのできるのが、これが本当の愛国なんだ。そういう預言者的な魂が今は非常に少なくなつたな。皆さん、若い人たちは、その意味において、キリストの光でこの預言書を読んでください。ただ学問的に読むのではない。預言書はそのようなエホバの霊をもつて語らしめられているところだから。

ルターは「エホバ」という言葉が出てくると、

「デア・ヘル」「主」

という訳にしている。「主」と訳したときに、彼は「キリスト」を常に思っていた。ルターにとつては、キリストは旧約から新約まで貫いていた。それくらい、ルターという人はキリストに酔っていた男です。

●根元現実

このバビロンの滅亡の預言のすごさ。そういう意味において、今読んだところは非常に大事なところですよ。その次は、アッシリヤのことになります。24節から。これはアッシリヤですから、イザヤの預言とみて差し支えない。第一イザヤです。多分、このアッシリヤがユダを攻めていった、あの有名な紀元前70年のエルサレムの包囲の前後の時のことでしょう。

24 万軍のエホバ^{ちかい}誓をたてて言い給わく、わがおもいし事はかならず成り、わがさだめし事はかならず立たん。

神さまの誓いだから、

「わがおもいし事はかならず成り、わがさだめし事はかならず立つ」

「わが思い定めしことは必ず成立する」

という。こちら側から言うところ、

「汝の御意は必ず成ります。汝の御意は必ず立ちます」

と。これが信の世界です。

「まだ、それでも成らないではないですか」

なんて、みんなすぐ現象をみるね。そうではない。現象の奥の世界、根元現象です。

「根元現象」(ウル・フェノメノン)



という言葉はゲートが好きな言葉だった。私は

「根元現実」(ウル・ヴィルクリッヒカイト)

と言う。この言葉もゲートも使っているね。ゲートという人は非常にこの「ウル」という言葉が好きな人で、何でも「根元」を突きとめる。大体、ドイツ精神というのはそういうところがありますけれども。

根元の現実です。目に見えない現実。現象の奥の根元の現象、これは必ず成っている。それが表面にはどのようにして展開していくかは、いろいろな相対的現実の要素がありますから。神さまはちゃんとそれを計らって善きようになさるだけのはなし。我々が受けとる信の世界はいつも根元現実の世界です。

「今」と言っても、そういった永遠的な質をもった「今」です。そういうところを歩いているんです。そういうところを見ている。そういう現実から聞こえてくる響きに耳を傾ける。イザヤに語っているのは、紀元前70年とか何とかというところだ。ところが、過去におけるこの神さまの言葉は今、我々に現実として響いてくる。でなければ、預言書を読んでいることにならない。

「そうですか、紀元前700何年にはそうでしたか」

なんて、そんなただ歴史の教科書みたいなことを言っているのではない。聖書はいつも終末的現実なんです。終末に向っている。ことにキリストの福音書の現実はみんな終末的現実ですよ。

²⁵われアツスリヤ人をわが地にてうちやぶり、

「わが地」というのはユダのことです。

わが山々にてふみにじらん。

逆に、いくら攻めてきたって、アッシリヤをやつつけてしまうぞと。

ここにおいて彼がおきし軛くびきはイスラエル人よりはなれ、彼がおわせし重負おもひは

イスラエル人の肩よりはなるべし。²⁶これは全地のことにつきて定めたる

謀略はかりごとなり。是はもろもろの国のうえに伸ばしたる手なり。²⁷万軍のエホバさ

だめたまえり。誰かこれを破ることを得んや。その手をのばしたまえり。誰

かこれを押返すおしかえことを得んや。

この27節は素晴らしい言葉だね。イザヤ書14章24節から27節は大事なくだりです。もう常識的にはイスラエルはこの時にエルサレムはやつつけられるはずなのに、アッシリヤの何万という軍勢が一夜にして死屍累々となつてしまった。イザヤはそこまで神さまの定めたる御意を信じぬいた。風に揺り動く林のごとくに皆は心が揺り動いたが、なんだと言って、イザヤは独りこのエホバに信じぬいた。一人のイザヤという信の塊みたいな男が信じぬいたらば、アッシリヤの軍隊は一夜にしてやつつけられた。これは事実なんです。列王記略にも書いてある。これはイザヤ書のもう少し後の方に、36章あたりに出ている。



●我はアーメンなり

「エメツ」(真理)という言葉がある。これは「アーメン」という字からくる。

「我は真理なり」

という。キリストは、ギリシア語でなくて、この「エメツ」という言葉で仰つたでしょう。

「我はアーメンなり」

ということですが、キリストは。エホバというアーメンなる実体を、

「はい、あなたはアーメンです」

と言う言葉が「信ずる」という言葉なんです。神さまが「我はアーメンなり」と言うときに、「あなたはアーメンです」と言つて答えるのが「信ずる」ということなんです。ヘブライ語の「信ずる」という字はそういう字なんだから。神さまをアーメンとすること。我々が「アーメン」と言つて、こちら側のなにか「はい、そうです」ということではない。

「あなたは、『はいそうです(アーメン)』という実体です。あなたはアーメンなる者です」

ということなんです。

「キリストはアーメンなるもの」

という言い方が黙示録にも出てくる。

日本語の「真理」という言葉が、「真理」とか「精神」とかいう言葉が、とかくちよつと観念的な響きを持っている。「精神」という言葉は本当は素晴らしい字だね、漢字でみると「神」という字がそこにあるのだから。

「アーメンなる者をアーメンとする」

という。でなければ、信仰ではないというんです。「信ずる」ということではない。

「アブラハムはエホバをアーメンとしました。そうしたら、エホバはこれを彼

のセデック(義)としました」

と書いてある。「彼の義とした」という「義とした」とは、「よし」という、「義を与えた」ということです。これも観念ではない。賜りたる義なんです。これに躓いたのがルターだった。義に躓いて困ってしまったんだ、審く義かと思つた。そうしたら、神さまの方から、

「この義はお前に無条件にやるぞ」

と。これが福音です。

「神の義は福音のうちに表れた」

という。ルターはこれに躓いて困つて苦しがつた。

そういう、「アーメンという実体」です。「アーメンなり」と言うときに、こっち側が偉そうな顔して、「アーメンなり」なんて言っているのではない。神さまに、キリストに、

「参りました。あなたは本ものです。あなただけが本ものです」

と言う。それが「アーメンなり」ということなんです。キリストは、



「私は本ものである。真理そのものである。生命そのものである。光そのものである」
と。それを、「参った!」と言って、これを言うんですよ。参らないで、いい気な顔して、「ア
ーメンなり」なつて言つたつてダメだよ。「参りました!」と。

「あなたというアーメンという実体には参りました。あなたという光には参りまし
た」

と言って、ぶつたおれる。そういうアーメンなる者に、

「あなただけはアーメンなる者です。参りました」

と言うことが、「信ずる」ということだ。本当は、「信ずる」なんていう言葉も要らない。

「アーメンとする」という、ヘブライ語は素晴らしい字だ。若い人は、何もヘブライ語の
大家になる必要はないけれども、大事な、預言者やキリストの言葉は多少知っていた方が
いいかもしれない。いいよ、知らなくても。日本語でそこまで眼光紙背に徹して読めてき
たら。

それが、預言者イザヤが「信」と言つて貫いた事態。彼が信仰の預言者であるというのは、
何も信仰というものを概念的に、神学的に押し立てたという、そんなことではありません。
イザヤはもう命懸けで、神さまの信がイザヤの中に今度は乗り移ってくるから、その祈り
の世界は強い。だから、一夜にして驚くべきことが起きた。

ヨハネ伝の中にも出ているでしょ。

「神の業は何ですか」

と聞いたら、キリストが、

「信ずる、これなり」

と言つた。これは神の業、神業かみわざなんです。信の世界は業なんです、最も驚くべき霊的行為
なんです。…(異言) …

そういうことでありますので、どうぞ、皆さん、今日は祈祷会なんだが、そういう角度
で爆発するまでは、みだりに祈りの言葉を出す必要はない。じーつと黙つていて――今日
はしばらく沈黙の祈祷会をやるうかな――沈黙してその世界に入るから、誰か爆発する。
バーツと爆発して祈りだす。それが本当の祈りです。

私は自分で黙つて祈つていて、坐つて祈つているうちに、震動が起きてくる。霊震れいしんが。口
でない。地震が起きる、天的震動が。それが祈りなんだ。からだで祈っているんです。口
ではない。だから、祈られている人に響くよな。

その信の世界は――預言者イザヤが信だということとは――このアーメンなる実体をアー
メンとすることである。それも、「参りました!」と言って、自分を投げ出して言うんですよ。
このイザヤ書14章24節から27節の、

「万軍のエホバちかい誓をたてて言給わく、わがおもしろし事はかならず成り、わがさだめ
し事はかならず立つ」



ということが、これがアーメンの実体者の言葉なんです。

「万軍のエホバさだめたまえり。誰かこれを破ることを得んや。その手をのばしたまえり。誰かこれを押返すことを得んや」

と。霊的実在を実にまざまざと人格的実在としてとらえているところが、この聖書の宗教の素晴らしいところです。そして、決してこれは偶像にならない。

●まるで戦国時代

その次に出てくるのは、今度はペリシテだ。

²⁸アハズ王の死たる年おもにの預言ありき。

「アハズ王」はユダの王で、「死にたる年」は紀元前715年です。

²⁹曰く、ペリシテの全地よなんじをうちし杖おれたればとて喜ぶなかれ。

「杖が折れた」というのは、アッシリヤの王が死んだことをいう。なかなか預言者は困るよ、こういう詩的な表現をするものだから。

蛇の根より蝮^{まむし}いで、その果はとびかける巨蛇^{おろち}となるべければなり。

だんだんそうなってくるけれども、今度は現れてくるのはもつと凄いやつが現れてくるというわけです。蛇が蝮になつたり、巨蛇になるんだから。

³⁰いと貧しきものはものくい、乏^{とち}しきものは安然^{やすらか}にふさん。われ饑饉をもてなんじの根をしなせ、

「根」というのは子孫のことです。

汝^まがのこれる者をころすべし。³¹門よなげけ邑^{まち}よさけべ。ペリシテよなんじの全地きえうせたり。

だから、杖が折れたって、いい気になるな、もつと凄いものが現れてくるぞというわけです。そして、やつつけられてしまうぞ、という預言です。

そはけぶり北よりいできたり、その軍兵^{つわもの}の列^{つら}におくるものなし。

³²その国の使者^{つかい}たちに何とこたうべきや。答えていわん、エホバ、シオン^{もとい}の基^{もと}をおきたまえり。その民のなかの苦しむものは避所^{さけどころ}をこの中^{うち}にえん。

だから、エルサレムの民は、どっこい、打たれてもまた立ち上がってくるぞと。

その次は、15章はモアブにかかる預言。いちいちやりません。5節、

⁵わが心モアブのために叫びよばわれり。

なんていう言葉があるね。要するに、モアブもやつつけられる。

その次、第16章。ここもまだモアブの続きだな。ここには一つの願いがでている。

¹なんじら荒野のセラより羔羊^{こひつじ}をシオン^{むすめ}の女の山^{おさめ}におくりて国の首^{おさめ}におさむべし。

「シオンの女の山」はエルサレムで、「国の首」のユダの王さまに貢ぎ物をおさむべしと。そ



う言つて、使者をエルサレムにやりなさいよということを言っている。5節、

5 ひとつの位あわれみをもて堅くたち、^{まこと}真実をおこなう者そのうえに坐せん。
彼ダビデの幕屋において審判をなし、公平をもとめて義をおこなうに速し。

これはモアブの人の言葉だが、モアブの人がイスラエルの王さまに対するちよつとほめ言葉なんだけれども、実はこれはひとつも本当の気持で言っているのではないという、ややこしいところだな。

6 われらモアブの^{たかぶり}傲慢をきけり。その高ぶること甚だし。
そんなことを言つて、へつらつたつてダメだと。

われらその誇りとたか^{いさじ}ぶりと忿^い怒^きをきけり。その大言はむなし。

今言つた言葉は本当じゃないよと、ちゃんと書いてあるな。11節、

11 このゆえにわが心腸はモアブの故をもて琴のごとく鳴りひびき、キルハレ
スの故をもてわが衷もまた然り。

その次の13節からあとは、ちよつとつけたりだから、これはまあいらないと。
それから、17章にいくと、今度はダマスコとエフライムのことが出てきます。

1 ダマスコにかかわる重負の^{おもに}預言いわく。視よダマスコは^{まち}邑のすがたをう
しないで^{あらつか}荒墟となるべし。

ここにもやはり審判がきてしまう。

3 エフライムの城はすたり、ダマスコの政治は^{まつりごと}やみ、スリアの遺れる者はイ
スラエルの子輩のさかえのごとく消えうせん。是は万軍のエホバの^{かりいれ}聖言なり。

4 その日ヤコブの栄えはおとろえその肥たる肉はやせて、^{かりいれ}あだかも收穫人
の麦をかりあつめ^{かいな}腕をもて穂をかりたる後のごとく、レバイムの谷に穂をひ
ろいたるあとの如くならん。6 ^{かんらん}されど橄欖樹をうつとき二二三の核を^み杪^{こずえ}にの
こし、あるいは四つ五をみのおおき樹の外^{そとも}面のえだに遺せるが如く、採り
のこさるるものあるべし。是^{これ}イスラエルの神エホバの^{ことば}聖言なり。

というので、エフライムの場合には、審判はあつても、「遺る、遺る」と書いてあるでしょ。
とり遺される者がある。大方はやつつけられるけれども、少数の者はとりのこされて救い
のもとになるということを書いてあるわけです。この6節はそういう気持で書いてある。

7 その日人おのれを造れるものを
創造主ですよ。

仰ぎのぞみイスラエルの聖者に目をとめん。8 斯ておのれの手の工^{わざ}なる祭壇
をおおぎ望まず、おのれの指のつくりたるアシラの像と日の像とに目をとめ
じ。

それでもう偶像はやめると言つて、こここのところにまことの礼拝があるぞということが書
いてある。まあとにかく、希望が多少のこることが書いてある。10節あたりは、またダメ



になることが書いてある。いろいろ劇的に書いてある。それから、12節、

12 ああおおくの民はなりどよめけり。海のなりどよめく如くかれらも鳴動めけり。もろもろの国はなりひびけり。大水のなりひびくが如くかれらも鳴響けり。

この時はまるで戦国時代みたいだね。起こったと思ったたらやつつられてみたり。特にアツシリヤのことが中心になって、いろんな民のことが言われているらしい。

13 もろもろの国はおおくの水のなりひびくがごとく鳴響かん。されど神かれらを攻めたもうべし。かれら遠くのがれて風にふきさらるる山のうえの糶糠のごとく、また旋風^{はやち}にふきさらるる塵のごとくならん。

どれもこれもダメだというわけだ、神さまの目で見ると。

14 視よゆうぐれに恐怖^{おそれ}あり。いまだ黎明^{よあけ}にいたらずして彼等は亡^うせたり。これ我儕をかすむる者のうくべき報^{むく}い、われらを奪うもののひくべき鬪^{くじ}なり。

これはアツシリヤのことですよ。アツシリヤの軍隊が一夜にしてやつつけられた。この言葉はあの前701年のことが背景になっているらしい。

●エホバの審判の日

その次は、エチオピア、それからエジプトと、いろいろ出てくるわけだ。18章の3節、

3 すべて世におるもの地にすむものよ、山のうえに旗のたつとき汝等これを見、ラッパの鳴り響くときなんじら之をきけ。

そういつた警告です。ちよつとこの3節はそういう意味で注目すべき句です。7節、

7 そのとき河々の流れのわかるる国の丈^{たけ}たく肌なめらかなる始めより今にいたるまで懼るべく縄もてはかり人をふみにじる民より、

この場合には、エジプトよりもエチオピアの方が強いんです。エチオピアがエジプトを隸属させた時代があったらしい。これはエチオピアのことです。

万軍のエホバにささぐる礼物をたずさえて、万軍のエホバの聖名のところシ

オンの山にきたるべし。

それであつても、なんといつても、イスラエルはその上だということを言おうとしている。

その次は、エジプトのことが19章に出てくる。エジプトが空しいことが3節に書いてある。偶像や呪文や巫女や魔術師なんてことが書いてあるでしょ。12節、

12 なんじの智者^{かしこきもの}いづくにありや。

「なんじ」というのはエジプトのことです。

彼らもし万軍のエホバの定めたまいしエジプトに係^かわ^ることを曉^{さと}り得ば、これをなんじに告ぐるこそよけれ。

けれども、そういうようなことを言うやつはいないじゃないか。ダメだというわけですよ。



それから、16節、

16 その日エジプトは婦女のごとくならん。

エホバの審判の日です。これはエレミヤ記51章にもちよつと出てきますが。

万軍のエホバの動かしたもう手のその上にうごくが故におそれおののくべし。

エジプトは少し今度は威勢がよくなつても、やつぱりダメだと。

17 ユダの地はエジプトに懼れらる。この事をかたりつぐれば聴くもの皆おそれる。これ万軍のエホバ、エジプトに対して定めたまえる謀略の故によるなり。

18 その日エジプトの地に五の邑あり。カナンの方言をかたりまた万軍のエホバに誓いをたてん。その中のひとつは日邑となえらるべし。

これはもうイザヤではない。少しあとの方になつてくる。一遍滅びてからあとの、神殿中心のイスラエルのことがどうも背景らしい。

19 その日エジプトの地の中にエホバをまつる一つの祭壇あり。その境にエホバをまつる一柱あらん。

22節から、

22 エホバ、エジプトを撃ちたまわん。エホバこれを撃ちこれを医したもう。

エジプトを撃つて、これを医す。本当は万国を滅ぼすためではないんだ、神さまの方は。撃つときは撃つけれども、なんとかして救おうという最後の悲願を持つていらつしやる。

この故にかからエホバに帰らん。

22節で急に異邦もエホバを信ずるに至るといふ。エルサレムはそのときにはもはや政治的中心ではない。宗教的中心になつてゐる。イスラエルの民はエホバを中心としての神殿宗教です。だから、これはやはり宗教の民として選びの民であるから、世界にその救いをもたらす中心はエルサレムであると。黙示録になると、天のエルサレムになりますけれども。そういう角度から、この「エホバに帰る」ということを言っているわけです。

エホバその懇求をいれて之をいやし給わん。

23 その日エジプトよりアッスリヤにかよう大路ありて、

さつきも出てきましたね。

アッスリヤ人はエジプトにきたり、エジプト人はアッスリヤにゆき、エジプト人とアッスリヤ人と相共につかうることをせん。

一緒になつて手をたずさえて、エホバに仕えろと。こんなことは今でも考えられないです、今の近東のあんな情勢を見ていると。しょっちゅうゴタゴタしているでしょ。背後にソ連がいたり、アメリカがいたり、いろいろしてますけれども。どうにもならんですね。

24 その日イスラエルはエジプトとアッスリヤとを共にし三あいならび地のうえにて福祉をうくる者となるべし。

イスラエル、エジプト、アッシリヤ。今までさんざんゴタゴタゴタゴタやつていた。イス



ラエル、シリア、アッシリヤ、ユダ、エジプト。そして、とうとうイスラエルはこのアッシリヤにやつつけられ、ユダはバビロニアにやつつけられて――ネブカドネザルです――そして、捕囚時代がきて、それから第二イザヤにくるわけですが。そういうゴタゴタで、要するにエジプトとアッシリヤの大国の間に挟まれているイスラエル、ユダ。けれども今、この預言は、イスラエルはもう王国ではない。宗教的な民としての中心を持ったイスラエルです。だから、このイスラエルの信仰がアッシリヤとエジプトに勝ったんだ。

●神の似姿の人に帰れ

そういう時がくるという。これは預言ですから――来なかったけれども――終末的預言ですから。今の世界でも、東にアメリカ、北にソ連、西に中国、その真ん中に挟まっているのが日本だ。アッシリヤ、バビロニア、エジプトみたいなものだ。この日本が本当に――戦争は憲法で止めたんだから――そういうことを徹底的にやっつけていけば、そして、日本人が、どこからみても素晴らしい民族だなと。ガリガリ亡者でなくて――造ったものはどんどん、貿易も今アメリカと問題が起きているようなことをしないで――そのような貿易や外交をやつて、本当に隣邦を愛する時がくるという。それぞれの角度において、イデオロギーはそれぞれ結構だと。

ただし、もちろんイデオロギーには限界があります。しかし、限界のない世界に、

「本当の人間の世界に、人間に帰れ」

ということだ。原人に帰る。

「神さまのお造りになった神の似姿の人に帰れ」

ということ。神の似姿の人に帰るならば、アメリカといえどもソ連といえども中国といえども、なんにも恐いことはない。

あれは本当の人だと。そうでしょ。ナポレオンがゲーテに会ったときに、

「あれは人間だ」

と言ったそう。非常に深い意味の「人」です。ゲーテという人は本当の意味においてこの「メンシュリッヒカイト」(人間性)を尊んだ人です。だから、ゲーテは「エーベンビルト・ゴッテス」(神の似姿)という言葉が好きなんだ。本来、人は神の似姿に造られている。

「上なるものに対する畏敬」

「同じような人たちに対する哲学的な畏敬」

「下のものに対する畏敬」

「下のものに対する畏敬」の念、エホバの僕、これがキリスト教だと、ゲーテは言った。一番深いのはこのキリスト教だと。ただもう一つある。

「内なるものに対する畏敬」

と、ゲーテは言った。「内なるもの」とゲーテが言ったのは、本来、神の似姿に造られている、



その神の創造に対する畏敬の念を持たないかと。我々にいわせれば、そこが聖霊の世界なんです。内なる神の、キリストの霊、これに畏敬の念を持てと言う。

「天上天下唯我独尊」

の「我」は「梵我」の我ですから。梵我だけが尊いんだと、お釈迦さんは言った。自分が尊いのではない。「唯我」の我は

「ただ梵我のみが尊い」

と。そのような化体になっている。化体してしまっているわけだ。

「神の似姿に本来造られているところに帰れ」

と。なかなか帰れないものだから、キリストが十字架をもって、復活をもって、聖霊をもつて、帰して下さっている恩寵がきているのに、なぜ、それを受けとらないかと。誰でも神の似姿です。その人を見れば、その中にある神の似姿に拝みたくなる。そういうような一人ひとりにおいてキリストが光りたもう。

「我は汝の光なり。汝のうちに於いて光るぞ。汝の中で生きるぞ」

というわけだ。

●我こそは遺りの民

そういうような事態になったら、それをもたらすものは、イスラエル、お前の民だ、お前だと。アッシリヤとバビロニヤはみんな一緒になって、

25 万軍のエホバこれを祝して言いたまわく、わが民なるエジプトわが手の工^{わざ}なるアツスリヤわが産業なるイスラエルは福^{さいわ}いなるかな。

わが世継ぎであるところのイスラエルは福^{さいわ}いなるかなと。このイザヤ書19章25節の言葉は凄いです。これが本当に体现されれば、世界は平和になる。万軍のエホバから祝されて、

「わが民なるソ連よ、わが手のわざなるアメリカよ、中国よ、わが世継ぎなる日本よ」

なんてなことを、神さまから言われるようなときは、歴史の終りまで来ないだろうね。来ないだろうけれども、その悲願をもつて我々は本当の仲介者に、本当の仲立ちにならないければダメなわけだ。日本はダメだよ。けれども、ダメの中にダメでない遺りの民は誰だと。人を見ることはない。

「我こそはその遺^{のこ}りの民である」

と言わなくては。

「はい、ここにあり」

とイザヤが言いました。そのところにもう立たなくてはいかん。何々教会であろうと、無教会だろうと、幕屋であろうと、召団であろうと、何だつていいよ。問題は、どの教団にいるかということではない。一人が本当に神の、キリストのものとして、本当にそれを証しているか。無言でいい。何も言う必要はない。



そういうところが、今、預言者イザヤがこの終末的悲願をイザヤ書19章22節、25節で語っているわけです。世界はこれを悲願として進んで行かなかつたら、ひっくり返る。みんな審かれてしまう。このイザヤ書のとおりだ。どれもこれもみんな審かれてしまう。みんなやつつけられてしまう。時は迫っているんです、正直。パウロも言ってます、

「もう時は迫った」

と。ペテロも言っている。そういつた迫りは、もう今は20世紀にきて、本当にギリギリのところに来ているね、正直。そして、みんながやけくそになると、戦争になる。もう理屈でない。やけくそになつて、もう生きるか死ぬかとなると、何が爆発するか。そういうものの凄い現実を私はもう夢で三回見ている。第三次戦争の或る光景を。いいよ、どうなつても。けれども、キリストという原始力、原始力体、――原始力をいただいている体――我々は一人びとりが原始力体となつている。水素爆弾よりか凄いいよ、この原始力体は。それだけの烈々たる光だか、何だかしらんけれども、祈りの世界で本当にそのキリストを受けとつてごらん。「何々してください」ではないんですよ。

「私をそれに化してください。あなたという火の中に入ると、聖霊の火の中に入ると、こちらまたそのような火になります。どんなに水をかけたつて、これは消えません。どんな運命環境にあつても、キリストの『我を視よ』になります」

と。ペテロもパウロもこの「我を視よ」の世界に入つていた。女の方であつても、みんなそうなんです。ジャンヌダルクがなぜ強かつたか。本当に霊が彼女に化してしまつていくから。サタンの力に対しては、もの凄い光をもつてこれに立ち向かうことができる。可哀相な者に対しては本当に愛の泉となつてこれを潤すことができる。キリストは無限無量の実体ですから、千変万化する表れ方をなさる。

だから、本当の福音の世界は説明なんかできませんと、私は言っている。何が組織神学かと。私は組織神学会の会員だが、もうはつきり言っているんだ、

「神学ではありません。ジステマ(組織)ではない。オルガーニッシュ(有機体的)でドラマーテッシュ(劇的)なものだ」

と。こんな乱暴なことを言うやつはいないんだよ、神学会にね。だから、私は除け者にされる。いいんだよ、除け者で。

●神の歴史の一端を賜る

第20章にいきます。

「アッスリヤのサルゴン王タルタンを

「タルタン」というのは司令官の官名です。

遣してアシドドにゆかしむ。

「アシドド」はペリシテの都会です。



彼がアシドドを攻めてとりし年にあたり、

紀元前711年です。

2 この時エホバ、アモツの子イザヤに托^{より}てかたりたまわく、往けなんじの腰よりあらたえの衣をとぎ汝の足より履^{くつ}をぬげ。ここに於てかれその如くなし^{はだかはだし}赤裸跣足にて歩めり。3 エホバ言^い給^{たま}く、わが僕イザヤは三年の間はだかはだし^{はだかはだし}に^{いたまわ}てあゆみ、エジプトとエテオピアとの予兆^{しるし}となり、奇^くしき標^{かた}となりたり。

そういう不思議なことが書いてある。この「赤裸跣足」というのは捕虜や奴隸の姿です。ひどい姿なんです。三年の間そのようにして神さまの預言をからだでもって示した。アッシリヤもエジプトもエチオピアも、この私のような姿で滅びるぞということですよ。大変な預言者だね、イザヤというのは。イザヤは王侯貴族の間に生まれたとか言われているけれども、彼はそんなものはひとつも問題にしていない。エホバの口となり、エホバの目となり、エホバの体となって、そのようにして預言を全存在で表したというわけです。パウロが本当にそうでした。あのコリント後書11章に出てくる諸々の艱難は、もう普通の人だったら、みんなぶったおれている。それを聖霊の力で乗り切った。最後は殉教の死を遂げたでしょ。もう天界でパウロは本当に執り成しているもの凄い実存ですよ。

私たちは――人間的な意味で言っているのではないですよ――本当に自覚しなければダメです、神の歴史の一端を賜って動かされているものであるということを。人がどう思うが、そんなことは一向に差し支えない。

「本ものは必ず後世にまでとどまる」

とゲーテが言った。必ずその後の世にその真価が表れて、後の世の人を動かす。現代で動くやつがいなくなっている。神の歴史はどのような歴史です。人間の書いた歴史は当てにならないのがたくさんある。天界に書かれている歴史は、天上の歴史は――それを写しているのは聖書ですけども――聖書はどのような神の歴史の展開しているところの、相対的次元に絶対次元が切りかかっているところの書だからね、この聖書というのは。滅びっこない。黙示録は必ず成就する。私たちの――人生観ではない――人生道はもう大変なものなんだ。それを何らかの形で表現するまでは、私は死にませんよ。

アッシリヤはとうとうそのように、アシドドも、エチオピアも、エジプトもみんなダメになる。けれども、このイザヤが預言しているところまで帰らない。終末的な預言で、悲願である。どこまでも歴史の終りまでイザヤのこの祈りは続いていく。これを聞かないかぎり、世界はひっくり返る。こういうわけです。アッシリヤとエジプトとイスラエルが一緒になって、「神さまー」と言うときがくるまでは、来なかったらひっくり返るという、こういう恐ろしい預言です。終わります。

